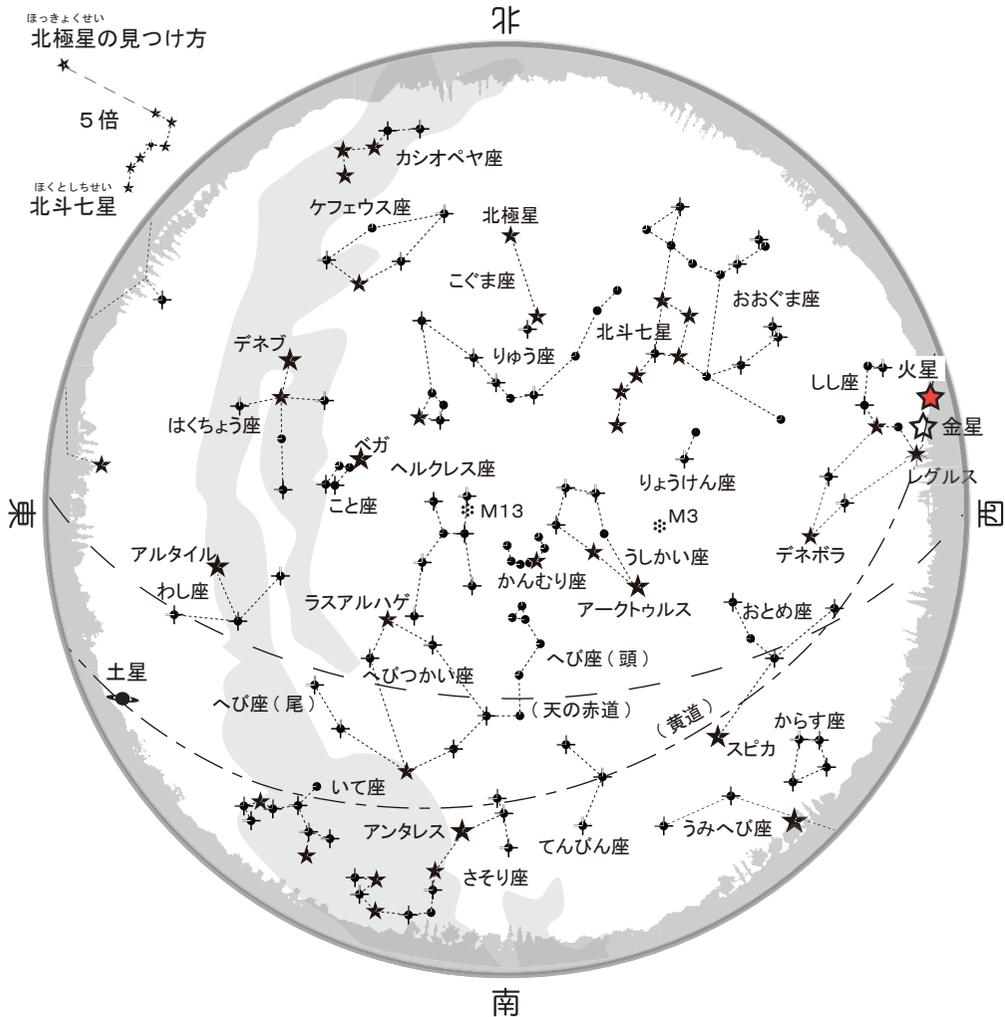


富山でみえる 2021年7月の星空

自分の見たい方角を下にして、その方角の空を見てみよう。



- ★ 1等星と、より明るい星
- ★ 2等星
- ✦ 3等星
- 4等星と、より暗い星
- ◎ 変光星
- ※ 星団
- ≡ 星雲
- ⑨ 銀河

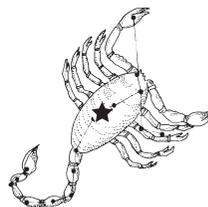
～この星空が見えるのは～

- 7月 5日 午後9時ころ
- 7月 20日 午後8時ころ
- 8月 5日 午後7時ころ

～月のようす～

- 7月 2日 下弦 ①
- 7月 10日 新月 ②
- 7月 17日 上弦 ③
- 7月 24日 満月 ④
- 7月 31日 下弦 ⑤

さそり座



赤い1等星アンタレスが目印です。釣針のような形に星が並んでいるので、日本では「魚釣り星」や「鯛釣り星」と呼ばれました。なお街明かりなどのため下半分は見えにくいことがあります。アンタレスは、とても大きな星で太陽の約700倍もあります。

へびつかい座



暗い星をつなぐと将棋の駒のような形を作ることができる星座です。頭のところにある星は、ラスアルハゲという2等星で、へびつかいの頭という意味です。へびの部分は別の星座(へび座)になっています。

こと座



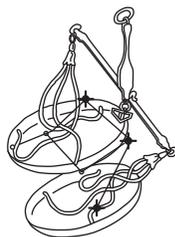
夏の星空で一番明るい恒星のベガが目印です。ベガは七夕のおりひめ星です。ベガの東側には望遠鏡で見ると4つに見える「ダブル・ダブルスター」という四重星があります。また、この星座にはドーナツのような形をした星雲(リング状星雲)があります。

わし座



七夏のひこ星であるアルタイルが目印です。アルタイルとは「飛ぶワシ」という意味で、2つの星がアルタイルを挟んで一直線に等間隔でならんでおり、この3つの星のならびを飛んでいるワシに見たてたそうです。

てんびん座



重さを量る天びんの形を表した星座です。おとめ座とさそり座の間にありますが、暗い星ばかりなので目立ちません。黄道十二星座の1つで、ギリシャ神話では、正義の女神アストライアが持つ天びんだとされています。

春・夏の星座の見つけかた



- 1 北の空で、北斗七星から北極星を見つめます。
- 2 北斗七星の柄のカーブを伸ばし、うしかい座のアークトゥルス、おとめ座のスピカと続く「春の大曲線」を見つめます。
- 3 アークトゥルス、スピカ、しし座のデネボラでつくる「春の大三角」を見つめます。
- 4 東の空に、青白くてとても明るい、こと座のベガを見つめます。それを手がかりとして、「夏の大三角」を見つめます。
- 5 南の空に、赤くて明るい1等星のアンタレスを見つけて、そこから釣り針の形をしたさそり座を見つめます。

西の低空で金星と火星が大接近。

<p>7月12日 午後8時ごろ (日没1時間後)</p> <p>レグルス (1.4等)</p> <p>火星 (1.8等) ★★ 金星 (-3.9等)</p>	<p>7月13日 午後8時ごろ (日没1時間後)</p> <p>レグルス (1.4等)</p> <p>火星 (1.8等) ★★ 金星 (-3.9等)</p>	<p>7月14日 午後8時ごろ (日没1時間後)</p> <p>レグルス (1.4等)</p> <p>火星 (1.8等) ★★ 金星 (-3.9等)</p>
西 北→	西 北→	西 北→

夕方、日の入りの後しばらくたつと、西の低い空に金星が輝き始めます。金星の近くには火星もあります。この2つの惑星が、7月12日から14日にかけてかなり接近して見られます。金星は地球の一つ内側を、火星は地球の一つ外側を回る隣の惑星ですが、地球から見てたまたま同じ方向に見えるのです。12日は月も近くにいるので、月を目印に金星と火星を探してみると見つけやすいでしょう。

七夕伝説と「月の舟」

天の川をへだてて離ればなれになった織姫と彦星が1年に一度、7月7日に会うことができるという七夕伝説。しかし、星が実際に移動することはありません。2つの星の間は14.4光年ほど離れていて、これは光の速さで約14年半かかってしまう距離です。つまり、二人が光速で移動したとしても、1年に一度会うことは、とても無理なのです。ところで、日本の伝説では、「月の舟」に乗って会いに行くことになっています。昔の暦は月の満ち欠けに関係していたので、7月7日が毎年ほぼ半月(上弦)となり、横から見ると舟を連想させる形ですね。今年、昔の暦で7月7日にあたる日は8月14日です。

